

紙上法話

「心を生かし合う」

センター布教師 島根県 正禪寺住職 吉長裕教



私は学校内外において、困難を抱える子供たちに関わり支援を行っています。

不登校、或いは登校できても集団生活に馴染めないなど、現れる状態は似ていたとしても、そこに至る理由と経緯は一人一人違います。しかし、人との関係を起因とすることが多くに共通するため、親子関係や友人関係のみならず、出会ってきた全ての人との関係を紐解き、踏み込んでいくこととなります。

子供の社会に接していると、威圧的且つ暴力的な言葉によって自分の優位性を保とうとする場面をよく目にします。

発せられる「うざい」「きもい」「きしよい」更に「死ぬ」などの言葉は、初めから相手を攻撃する意図を以て繰り出す場合もあれば、自分の立場が悪くなった時には盾の意味を持つことも往々にしてあります。

一方で言われたほうが受けるダメージは決して軽くありません。大人の私が言われてもぎゅっと心が収縮するのを感じますが、子供にとっては尚更強烈な痛みが心に蓄積されていきます。回避するためには、疲弊した心を閉ざすしかない状態まで追い詰められた子供たちと何人も向き合ってきました。

また別の関係として、双方が長期間に亘って言い返すことを繰り返して、互いに傷付け合う状況に陥った結果、大きなダメージを受けて表情の無くなった子供もいました。

「人の悪口を言うと自分も悪口を言われるよ。攻撃すれば攻撃が返ってくる。でもね、人に優しくすると優しくさまた必ず返ってくるんだ。皆はどっちがいいかなあ。例えばね……」と幾つかの事例を挙げて対話すると、揃って「優しいほうがいい」と答えますが、時に自分の優位性が崩れそうになると安易に強い言葉で牽制する子供が現れます。

子供の社会は大人社会と同じです。但し、それは子供たちが自ら作ったのではなく、大人を見て真似をしながら行動した結果として存在しています。

道元禪師は『ただまさに、やわらかなる容顔をもて、一切にむかうべし』と示されました。

いつでも和やかな顔つきで全てに接しなさい、との意を理解するならば、他者を思いやる慈しみの心である慈悲へと繋がります。

そしてその慈悲の実践こそが、お互いを生かし合い、それぞれを尊重し合う社会の形成に向かって繋がっていきます。

温かい言葉と柔らかな笑顔が溢れる環境に生きる人の心はとても穏やかです。

今、生きづらさを感じている子供たちにとって、先の社会全体がそうであるために、私たち大人が慈悲の実践をし続けることが大事なのだと思います。